

学長室だより

2013.12.16 NO.2

「算盤の典^{ノリ}」と呼ばれた留学時代

子供の頃の習い事というのは、子供自身が習いたいと思って始めることも勿論あろうが、親が子供の為に良かれと思って子供に始めさせる事の方が多いのではなからうか。その始めの動機はどうであれ、3～4才のときから始めなければ開花しないという類いの習い事もある。例えば、バレエや囲碁・将棋、技術を要する楽器の演奏など。（初代学長の中嶋先生に於けるバイオリンなどもこの好例であろう。）

私の場合の習い事というのは算盤であった。始めたのは小学3年の時である。その動機は、算盤塾の先生が、親戚の人であった事で、私の母親が習わせてみてはどうかと思った事にあるらしい。私も不精無精習い始めたという記憶がある。ただ始めてみるとその上達が嬉しくて、毎日算盤塾に通い、小学6年生の時に一級の試験に合格した。算盤の試験科目としては（私の記憶が正しければ）、加減算、掛け算、割り算、見取り算（暗算）、伝票算等があるのであった。私は暗算が得意で、5桁～6桁の暗算は大体正確に出来た。頭の中に算盤の珠のイメージがはっきりと刻みこまれていて計算出来るのである。中学に入ると他の事が忙しくなって、算盤塾通いも止めざるを得なくなったのだが、暗算のピークは恐らく小学5年くらいから中学生の間なのではないかと想像する。それから50年余りも経って、今でも算盤の珠は頭の中に浮ぶのだが、計算できるのは2桁～3桁の数字の足し算くらいになってしまった。脳力の低下はあきらかである。

算盤について思い出すのは以下の事である。私が米国に留学していた1970年代半ばの頃、丁度米国でも小型の計算器（カリキュレーター）が普及しだしていた。一般に米国の人々は計算することが得意ではなく、小型（といっても縦20cm、横15cm位の代物）の計算器の便利さは驚きであり、米国人の学生等はそれを持っていることが自慢でもあった。ある時、私の友人がさも大事そうに計算器を取り出して皆の前でそのキーを打ち、即座に計算してみせた。皆は感心してそれに見入ってしまった。恐らく4桁くらいの数字を10個程も足し算することだったろう。私もほとんど同時に暗算をして、答えが同じであったので“*You are right!*（ご名算！）”と言ったのだが、周りの皆はどうしてお前はそんな事が言えるのか、という口振りで私をみつめた。私は自分の頭の中に *abacus*（算盤）が埋め込まれているのだと答えた。皆は私が冗談を言っていると思ったらしく、それでは計算器と私とで勝負してみろということになった。私はどんな桁数の計算でも私が勝ると言い放った。

暗算の場合、例えば下の方の3桁（又は4桁）くらいを計算して行き、次の位の3桁、その次の位の3桁、というふうに加えていければ幾桁の計算でも出来るのだ。しかし、計算器は桁数の上限は11～12桁（10億の単位）くらいなのであった。その上に計算器のキーを打つ米国の友人の指が大きく、その動きも緩慢で、私の脳中算盤にかなうわけがなかった。

やがて、騒ぎ（10人くらいの人ばかりだったろうか）をかぎつけて、指導教授やその他の職員もかけつけるといふ事態になってしまった。その後、どう事態を收拾したか憶えていないのだが、しばらくの間、私のニックネームは“*Abacus Nori*”（「算盤の典」－私の名前は典比古－）ということになった。



鈴木 典比古